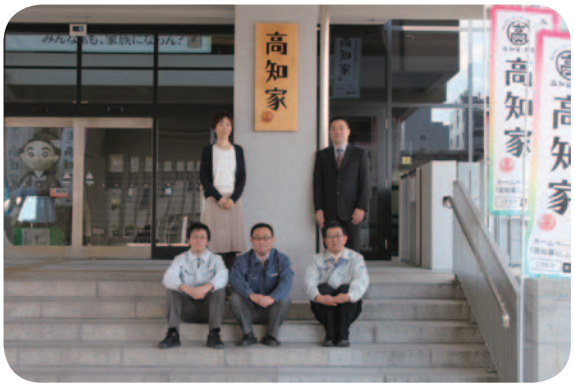
会員だより

「災害復旧事業に従事して」

高知県土木部
防災砂防課 主査
金子　千鶴



防災復旧班（筆者は左上）

1．はじめに

私は高知県土木部防災砂防課で公共土木施設災害復旧事業の経理を担当しています。防災砂防課の災害復旧班は、技術職員３名と事務職員２名で構成されています。

防災砂防課には、今年の４月に配属となったのですが、入庁して初めての経理担当、しかも、一般的な公共事業に比べ非常に煩雑だと言われる災害事務に最初は馴染めず、慣れるまでは非常に苦労しました。

また、土木技術の専門用語は初めて耳にするものばかりで、配属された当初は恥ずかしながら職員同士の会話を聞き取ることができませんでした。

しかし、現在は他の職員方にご指導いただいたおかげで、少しずつではありますが、災害復旧事業に理解を深めているところです。

2．高知県について

高知県は、北は四国山地、南に太平洋を臨み、西部はリアス式海岸、東部は隆起海岸となっています。

平成23年には、室戸半島が世界ジオパークに認定されました。

室戸半島では、白亜紀（約１億年前）から現在にかけて形成された地質や地形を見ることができ、パワースポットとしても注目されています。

高温多湿な気候で、高知平野では早場米が収穫され、８月には新米を楽しむことができます。

足摺岬や室戸岬では亜熱帯植物が自生しており、遊歩道を歩くと、まるで外国にいるような錯覚に陥ります。

このような、温暖な気候、複雑な地形、台風等の気象現象が高知県特有の風土をつくりあげています。

室戸岬
（公財）高知県観光コンベンション協会提供

3．高知県の気象

高知県は年間降水量が2,500ミリから3,000ミリと、日本でも有数の多雨地帯となっており、土砂災害等の被害が少なくありません。

私は広島県出身なのですが、高知県で暮らし始めた当初は、雨の量と激しさに非常に驚いたことを覚えています。

また、台風の影響を受けることも多く、大雨、高潮や竜巻等による被害も毎年多く発生しています。

会員だより

4．災害復旧事業に従事して

上にも書きましたが、私は広島県の沿岸部出身で、高知県で生活を始めて6年目になります。

高知県で降る雨は、広島で降る雨と異なり、短時間にたくさん降るという印象があります。文字どおりバケツをひっくり返したような雨の降り方をします。

そういった集中豪雨や台風の後には、災害復旧班には多くの被害報告が入ってきます。

災害担当になるまでは、雨や台風により被災する道路や河川がこれほどたくさんあるとは思ってもいませんでした。ニュースになるような被災は、規模の大きなものだけだと知りました。

私は経理担当なので、普段は被災箇所に臨場する機会はありません。初めて災害の現場に赴いたのは、7月に行われた第5次査定でした。

その日は太陽が照りつけ、気温30℃を大幅に超えるとても暑い日でしたが、災害査定官、立会官そして申請者である自治体職員は暑さをものともせず、非常に緊迫した雰囲気の中で実地査定を行っていました。

実地査定の次の日、査定設計書に朱が入る瞬間は、災害報告から査定受検までの申請者の仕事が認められた嬉しさを感じました。

査定に随行するまでは、自分の担当である災害復旧事業の経理事務を「書類上で数字を操り管理する仕事」という認識しかありませんでした。しかし、被災箇所や査定の現場を目の当たりにしたことで、自分の担当する経理事務は、被災施設の早期復旧のための重要な仕事の一つであると自覚する良いきっかけとなりました。

その後9月には、成功認定検査の実地検査に随行させていただきました。

竣功した被災箇所を訪れたのも、その時が初めてでした。先だって確認した被災写真の状況から原状回復された現場を見て、(復旧延長326mの規模の大きな工事箇所だったこともありますが) 目の前に自分たちの仕事の成果があるのだと思うと感動を覚えました。

吉野川沈下橋

5．災害復旧事業経理の難しさ

私は災害復旧事業が初めての経理担当なので、一般の補助事業と比較できないのですが、煩雑でとても難しく、未だに苦労しています。

適切な予算執行のために、重要だと学んだことがあります。それは、出先事務所と緊密に連絡をとることです。災害事務に慣れるまでは、提出期限のある書類の作成等で余裕がなく、適切に予算を執行するための予算管理が不十分でした。

工事の執行状況は、土木事務所からの情報を記録していくことしかせず、こちらから土木事務所に執行状況の把握や調整を働きかけることを怠っていました。その結果、事務所担当者に迷惑をかけることが少なくありませんでした。現在は、技術職員に相談し、アドバイスをいただきながら、各事務所と連携をとって業務を進めています。

今年度もあと少し、年度末に向けて適切な予算執行に努めていきたいと思います。

6．高知家

「高知県は、ひとつの大家族やき。」をスローガンに、広末涼子さんを高知家の娘として、高知県のPRキャンペーンを実施しています。

ここからは私が、「高知家の一員になってよかった」と思ったことを紹介します。それは、高知家の「食卓」です。高知家の食卓には、太平洋で獲れるたくさんの海の幸と、温暖な気候で育った山の幸が上がります。

カツオの刺身、タタキはもちろん、マンボウや

会員だより

クジラの料理もあります。ゆず、土佐文旦や小夏といった柑橘類もおいしいです。

高知家の人たちの多くは酒好きです。高知家の酒は、淡麗辛口ですっきりした喉ごし。口当たりがよく飲みやすさには定評があります。

高知家には「返杯（へんぱい）」という文化があります。まず､杯を相手に渡してお酒を注ぐと、一気に飲み干してくれます。空いた杯を返され酒が注がれるので、一気に飲み干します。空いた杯をまた相手に渡し、お酒を注ぎます。注がれたら注ぎ返す。これの繰り返しです。

高知家に慣れていないころ、酒を注がれたら無理して飲んでいたのですが、注がれた酒を飲み干すふりをして空いた皿に捨てている人を目撃してからは、無理して飲むのをやめました。

興味をもたれた方はぜひ、高知家の食卓に遊びにきてください！ 待ちゆうき!!

カツオのタタキ
（公財）高知県観光コンベンション協会提供

土佐文旦
（公財）高知県観光コンベンション協会提供